View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

夢野久作『ドグラ・マグラ』「絶対探偵小説　脳髄は物を考える処に非ず」解釈ノート
―脳髄は物を考える処でもある―

Attemption to Exposition on ‘Abusolute Detective Novel: a Brain Does Not Think’ in ‘Dogura-Magura’ by Yumeno Kyusaku: a Brain also Thinks

山口隆介
Yamaguchi Ryusuke

要　旨

本研究ノートは、夢野久作『ドグラ・マグラ』中の一章(？)「絶対探偵小説　脳髄は物を考える処に非ず」註釈の試みである。「脳髄は物を考える処に非ず」という文言は有名で、しかも、正木敬之のセリフによって「「考える処に非ず」をモウ一つタタキ上げて行くと、トドの詰りが又もや最初の「物を考えるところ」に逆戻りして来る」[1]という構造も、二三の文章で言及されていながら、本章の文言を詳細に追った研究は見当たらない。筆者も詳細と言えるほどの研究をできたわけではないが、夢野久作が当該の文章を、一定の理路のある議論として執筆していること、そしてタイトルに相違して、「脳髄が物を考える処でもある」ことの理路も存在することを明らかにすることができた。

あるいは本書の愛読者にとっては公刊されるまでもない常識的な読解を、畑違いの蛮勇で得々として示しているにすぎないのかもしれない。また、筆者の思いもよらぬ付会が紛れ込んでいるやもしれぬ。しかし、哲学の分野で自分が読んだことがない解釈であるので、世間に公表することに価値もあるやに思う。

Key Words:『ドグラ・マグラ』、心身二元論、大正生命主義

以下、『ドグラ・マグラ』中の一章「絶対探偵小説　脳髄は物を考える処に非ず」より、本章の理路を明らかにする手がかりとなる文言をテーゼとして引用し、註釈を施す形で考察を進める。なお、読みやすさを考え、テーゼはゴシック体で提示する。必要に応じ、他著作および『ドグラ・マグラ』の他の箇所からの引照も行なうが、提示の体裁はテーゼの場合と同様とする。

テーゼⅠ

「脳髄のために人間が存在しているのか、人間のために脳髄が設けられているのか、イクラ考えても見当が付かない」[2]

「ために」という語は、目的をあらわす。目的の方が主であり、そのためにあるものはいわば道具、あるいは手段である。ここでは、脳髄＝人間にして人間＝脳髄であるにしても、人間を存在させるために脳髄という器官が、場所、ないし道具として存在しているのか、それとも、脳髄がその機能を発揮するため、言うなれば仮構された主観的現象が人間なのか、それが分からないという問題提起がなされている。

テーゼⅡ

「それは他事でもない、その脳髄と自称する蛋白質の固形物自身が、古往今来、人体の中でドンナ役割をつとめているのか、何の役に立っているものか……という事実を、厳正なる科学的の研究にかけて調べてみると、トドのつまり「わからない」という一点に帰着する事だ」[3]

この文を解釈するうえでの問題点は、「脳髄の役割を科学的研究にかけて調べてみると、わからないということに帰着する」という結論が、どのような意味で出されているのか、ということである。「今現在の科学では知られていない」という事実を「科学では分からない」ということと混同しているとすれば、それは哲学的にはとるに足らない妄言である。「科学という視座では、原理的に分らない」という主張であるなら、その主張の当否は別として、哲学的には十分論ずるに足るテーゼとなる。

テーゼⅢ

「モット手短かにいうと「脳髄が、脳髄ソレ自身の機能を、脳髄ソレ自身に解からせないように解からせないように努力している」とでも形容しようか」[4]

脳髄≠自己であるなら、脳髄が脳髄自身の機能を脳髄自身に理解させないよう「努力」している、ということは自己にとって問題にならない。脳髄が脳髄を理解させないよう瞞着する対象は自己でなければならない。ゆえに、このテーゼがある限り、脳髄＝自己という図式は、『ドグラ・マグラ』という著作において、少なくとも本章においては貫かれているものと見るべきであろう。したがって、「脳髄は物を考える処に非ず」という、章題にも関わらず、脳髄は自己なのである。そのことは、アンポンタン・ポカンが、自分の頭蓋から

引きずり出した脳髄を踏みつぶす仕草をするや昏倒してしまう[5]という展開や、本章末尾近くで正木博士みずから、「「脳髄が物を考える」という従来の考え方を、脳髄の中で突き詰めて来ると「脳髄は物を考える処に非ず」という結論が生れて来る……(中略)……その「考える処に非ず」をモウ一つタタキ上げて行くと、トドの詰りが又もや最初の「物を考えるところ」に逆戻りして来る」[6]と発言していることからも明らかである。

テーゼⅣ

「わからないわからない。いったい僕の脳髄は今まで何をしていたのだろう……何を考えていたのだろう」とか又は「僕の脳髄が僕の全身を支配しているのか……それとも僕の全身が僕の脳髄を支配しているのか……解らない解らない」[7]

ここでは「僕」「脳髄」「全身」という概念が登場している。そのうち「僕」という概念は、この箇所の中ではほとんど機能を発揮していない。それは、「僕の脳髄」と「僕の全身」の関係がつぶやきの主題となっているので、「脳髄」と「全身」の対比において「僕」は無視することができるからであると同時に、この「僕」が個人的な記憶、個人的な過去を一切喪失しているため、何者でもなく、誰でもありうる「自己」だからである。またテーゼⅢに従うなら、自己＝脳髄であるから、僕＝脳髄であることは疑いない。

「全身」という概念は厳密にいうと脳そのものを含んでいるが、久作自身の自覚において、この「全身」が「脳髄」を除いた全身か、「脳髄」を含む「全身」かは不明である。しかし、「脳髄」を除いた全身と考えねばならない理由もないので、「脳髄」を含む全身と考えておく。そう考えるなら、脳髄は脳髄以外の身体全体だけではなく、脳髄自身をも支配しているのか、という問いが、テーゼⅣには含まれることになる。

テーゼⅤ

「現代二十億の人類は悉く、諸君と同様の阿呆である。郵便局に自分の引越し先を尋ねに行く頓馬とんまである。電話口でこちらの番号を怒鳴る慌て者である。『脳髄』を『物を考えるところ』と錯覚している低能児である」[8]

ここで想定されている「阿呆」は、脳髄を考えるところと見なしている人々である。そして、それが「郵便局に自分の引っ越し先を尋ねに行く」、「電話口でこちらの番号を怒鳴る」という比喩で表現されている。こちらの番号も、引っ越し先も、自分の本来の居場所の比喩である。そして、これは自己の所在が脳髄か否かという文脈で語られており、脳髄

が電話交換局に譬えられている以上、「電話口でこちらの番号を怒鳴る」というのは自分のすでにいる本来の居場所に連絡を取るべく脳髄に求めるということである。したがって、このテーゼに局限された文脈では、脳髄が考えるところではない以上、自己は脳髄以外のところ、全身の細胞一つ一つか、その全体かに存立するにもかかわらず、脳髄を自己と捉えてそこから体のあちこちに脳神経を通し指令を出しているというイメージでいるということになる。

いっぽう「郵便局に自分の引っ越し先を尋ねに行く」の場合、脳髄が郵便局に譬えられている。この場合も、通信を差配する場所であるということで、情報を集約し、各所に送る脳髄の比喩にあてがわれているのであろう。ただ、問題になるのは「自分の引っ越し先」という比喩である。自己存立の場が全身あるいは人間全体から、脳髄に局限化されたということを、脳髄の思考、すなわち科学的洞察によって保証してもらうという意味がこめられているのであろうか。

（ここまで論じてきて気づいたが、本章を読むと、ヘポメニアスの挿話では脳髄の機能が分からずにヘポメニアスは悩んだとされ、本章の語り起こしで正木が脳髄の正体不明さを強調していることから、脳髄が何のための器官か不明であることばかり印象に残る。しかしながら、脳髄が電話交換局に譬えられていることからも分かるように、情報が集約され、また振り分けられていく器官であることは、実は明瞭に認識されている。）

テーゼⅥ

「人間の脳髄は自ら誇称している。/『脳髄は物を考える処である』/『脳髄は科学文明の造物主である』/ 『脳髄は現実世界に於ける全智全能の神である』」[9]

ヘポメニアスの挿話にもあるように、脳髄を物を考えるところとする考えは、本作中で言われるところの唯物科学の進展と重ね合わされている。久作は本作に、西洋と日本という図式を持ちこんでおり、西洋の唯物科学に対する精神科学という図式も持ちこんでいる。その意味ではかなり本作はかなり単純なつくりをしている。人間は精神で考えているのではなく、脳髄で考えているという見方が、唯物科学文明を脳髄が生み出すことを可能にした、ということを、久作は説明抜きに通じるものと考えていたのであろうか。

唯物科学は作中で相当敵視されている。ただし、胎児の夢がヘッケルの思想に基づいていることからも分かるように、正木の唱える精神科学が物質性から自由なものかどうかは怪しい。哲学的徹底がなされていないとも言える。

唯物科学だけの世の中になると人類がどうなるか、という効果の面に関しても、「人間を神様以上のものと自惚させた」、「人間を大自然界に反抗させた」、「人類を禽獣の世界に逐返した」、「人類を物質と本能ばかりの虚無世界に狂い廻らせた」、「人類を自滅の斜面スロープへ逐い落した」ということが述べられる[10]が、このあたりは、久作の父、杉山茂丸あたりの右翼的言辞の繰り返しか、当時の世相の反映かであってそれほど中身はないと見えるかもしれない。しかし、後の箇所でこの5段階は進行の機序を与えられている。

ちなみに久作作品において、唯物思想と人間の邪悪化を結びつける発想は『ドグラ・マグラ』だけでなく、『悪魔祈祷書』にも見られる。以下、『悪魔祈祷書』より2か所引用し、引照を試みる。

『悪魔祈祷書』引照Ⅰ

「……(前略)……**医薬化学の研究に転向してより、宇宙万有は物質の集団浮動に過ぎず。人間の精神なるものも亦、諸原素の化学作用に外ならざるを知り**……(中略)……**地上に於て最真実なるものは唯一つ、血も涙も、良心も、信仰もなき科学の精神を精神とする所謂、悪魔精神なる事を信じて疑わざるに到れり**」[11]

『悪魔祈祷書』引照Ⅱ

「**世界の最初には物質あり。物質以外には何物もなし。物質は慾望と共に在り。慾望は又、悪魔と共に在り。慾望、物質は悪魔の生れ代り也**」[12]

上に引用した文言は、実は『悪魔祈祷書』の大筋には関係がない文学的装飾に当たる文章である。しかし、このグノーシス派的内容は、唯物科学思考が人間を邪悪にするという構図において『ドグラ・マグラ』における唯物論的世界観への評価と通底する。その意味で、久作が本気でそのように考えていたかどうかはさておき、久作にとって持ちネタの一つであったということはできそうである。しかしながら、『悪魔祈祷書』になく『ドグラ・マグラ』にあるのは、考えるところとしての脳髄が科学の創始者、「科学文明の造物主」とされていることである。

テーゼⅦ

「生命の本源を神様の摂理だなぞというのは嘘だ。神様は人間の脳髄が考え出したものに過ぎないのだ」[13]

上記は、アンポンタン・ポカンの演説に登場するヘポメニアスのセリフである。ヘポメニアスは、考えすぎて頭痛が起きたことから脳髄を思考の座であると考え、そして、脳髄

を中心とした神経細胞の糸が人体を構成する三十兆の細胞すべてに行き渡っていることから、脳髄こそ生命の本源であり、精神は脳髄の「蛋白質の分解作用によって生み出された、一種の化学的エネルギーの刺戟」[14]であると喝破する。

すなわち、本章において、脳髄がものを考えるところであるということは、精神が物質的エネルギーの刺激の産物であるということである。そのような脳髄観はそのまま思考観となる。そして、そのような思考観は、思考を唯物的方面に集中させ、しかもそれを正当化することになる。久作はここで、このような思考観が唯物科学を生んだとしているものと思われる。

その後、脳髄は、人体そのものを含む全自然の人工化をすすめる。具体的には、生活は人工的な家屋で営まれ、電気とガスなしでは生きられなくなり、そして薬物で健康を維持するというように。

かくて、神と自然が脳髄により打倒された。次いで標的にされるのは道徳である。

テーゼⅧ

「『物を考える脳髄』は、同時に人類の増殖と、進化向上と、慰安幸福とを約束する一切の自然な心理のあらわれを、人間世界から奪い去った」[15]

ここで自然な心理の表れとされているのは、「父母の愛、同胞の愛、恋愛、貞操、信義、羞恥、義理、人情、誠意、良心」[16]などの、いわば徳目と言うべきものである。そしてこれらは、「唯物科学的に見て不合理である。だから不自然である」[17]という理由で否定される。そこで「物質と野獣的本能ばかりの個人主義の世界」[18]が現出するに至ったと、個人主義が槍玉に上がるのは当時の世相の中での右翼的言辞であろう。しかし、唯物科学的に見て不合理であるがゆえに不自然であるという言説には、自然を脳髄が人工化した結果、脳髄化＝唯物科学化した自然という本来は不自然なものに反するがゆえに、自然なものがかえって不自然とされる、という機序が見て取れる。上記徳目は人間の自然な心理の表れであるがゆえに、異常とされるというのがこの箇所での分析である。

かくて、テーゼⅥ中で、唯物科学的世界観が人類におよぼす効果として語られた、「人間を神様以上のものと自惚させた」、「人間を大自然界に反抗させた」、「人類を禽獣の世界に逐返した」、「人類を物質と本能ばかりの虚無世界に狂い廻らせた」、「人類を自滅の斜面スロープへ逐い落した」という脳髄の罪業のうち、第４段階までが一本の理路で説明された。そして、それは人類滅亡への途であるとされる。

この理路の出発点は、ヘポメニアスに象徴される科学者が脳髄のトリックにひっかかったことであった。このトリックは、罠という意味の日常的表現であると同時に、正木敬之がアンポンタン・ポカンを主人公に語っている譬え話を「科学探偵事実小説」と呼んでいることと結び付けるなら、「脳髄が犯人だ」とあえて底を割る表現である。いや、底を割るまでもない。この「科学探偵事実小説」において脳髄は、倒叙ものよろしく、「『物を考える脳髄』はにんげんの最大の敵である」[19]と議論に先立って明かされている。

テーゼⅨ

「吾々が自分の生命、もしくは精神として意識しているものの正体は、全身無数の細胞の一粒一粒が描きあらわすところの主観客観が、脳髄の反射交感作用仲介で、タッター つにマン丸く重なり合ったのを、透かして覗いているだけのものだ」[20]

アンポンタン・ポカンの演説中の発言だが、ここで一瞬、脳髄は考えるところであるという見方が垣間見える。アンポンタン・ポカンは、体の末端で、たとえば指に棘が刺さるなどした際、その刺激が神経を伝わって脳髄に達し痛みを感じるという説明を否定する。指に棘が刺さった場合、指が痛いのであって、脳が痛いのではない。全身の細胞一つ一つがそれぞれ生き、感じ、それを伝え合っている。後の「胎児の夢」につながっていく議論であるが、細胞は神経でつながっていようがどうしようが互いに交感しあっている。それゆえ、脳神経の一部に故障があると、原始的な生物が持っていた細胞相互の反射交換作用、すなわち神経に拠らない反射交換作用によって、「笑いの電流」なり、「悲しみの電流」なり、「怒りの電流」なりが駆け巡って特定の感情だけが噴出するということになる、というのが脳の異常に関しアンポンカン・ポカンが与える説明[21]である。そして、一つひとつの細胞の感覚や意識を、本章でも「胎児の夢」でも、正木敬之は「霊能」[22]と呼んでいると筆者は解釈する。

つまり、最後に己れの脳髄を踏みつぶしてしまうアンポンタン・ポカンはともかく、正木敬之は脳髄が思考に必要であることを否定はしない。正木敬之が否定すること、それは、精神作用とされるものを、脳髄を頂点とした神経系が独占しており、脳髄に至らなければ何事も事実として認められないという脳髄のあり方[23]である。本章は新聞記事の体裁をとって書かれているが、つまり「脳髄は物を考える処に非ず」というタイトルは、新聞記事が往々にしてそうであるように、全体の正確な要約ではなく、目を引きやすい一局面を取り上げたものにすぎない。ただし、脳髄と神経系による精神活動の独占を拒否することによ

って、思考の本体が脳髄でなくなるのは確かである。脳髄は、人体にとってすべての情報を集約し振り分ける交換台であって、それだからこそ、そこにおいて全身からの情報がひとまとまりに重なり合っている様は精神とも思考とも言いうる。しかし、それは同時に全身三十兆の細胞の霊能の反射に過ぎず、その意味では全身すべての細胞の霊能、あるいは生命こそが、そのまま精神活動である。

おそらく、先ほど脳髄の故障についてのアンポンタン・ポカンの説明を取り上げたが、そこに出てくる笑いや怒りなどの感情の電流の方が、神経よりも思考や感情の本体たりうるというのが、正木敬之の考えなのであろう。そしてそれは、神経細胞を含む、全身すべての細胞の霊能ないしは生命に帰着する。したがって、正木敬之が唯物科学を批判する時、その唯物の反対語は精神、観念ではなく、生命である。

「胎児の夢」による上記テーゼⅨ解釈の引証

引証Ⅰ

「斯様に偉大な内容を持つ細胞の大集団が、脳髄の仲介によって、その霊能を唯一つ、即ち各細胞共通、共同の意識下に統一したものが人間である。だからその人間があらわす知識、感情、意志なぞいうものは、細胞一粒一粒のソレよりも遥かに素晴しいものでなければならない筈であるが、事実は……(中略)……人間の形に統一された細胞の大集団の能力は、その何十兆分の一に当る細胞の能力の、その又何十兆分の一にも相当しないという奇現象を呈している。これは人間の身体各部に於ける細胞の霊能の統一機関……すなわち脳髄の作用が、まだ十分の進化を遂げていないために、細胞の霊能の全分的な活躍が妨げられているものと考えられる」[24]

ここでは、脳髄が霊能の統一機関として人体内で重要な地位を占めていることが述べられている。しかし、「細胞の霊能の全分的な活躍」を可能ならしめるにはいまだ十分進化していないとされる。

引証Ⅱ

「換言すれば現代人類の、かくも広大無辺な文化と雖ども、その根元を考えてみると、こうした顕微鏡的な存在に過ぎない細胞の一粒の中に含まれている霊能が全地球表面上に反映したものに外ならぬのである」[25]

人類の文化は、細胞の霊能すなわち生命が反映したものとされる。脳髄が霊能の統一機関である以上、通常の場合、霊能の反映は脳髄を通して地球上にもたらされているはずで

ある。しかし、その場合も、脳髄は中継地点に過ぎない。主体となっているのは脳髄ではない。個々の細胞でもなく、その霊能すなわち生命である。

総括

かくて、夢野久作『ドグラ・マグラ』の脳髄論においては、脳髄は考えるところでないと同時に考えるところであると言えることが明らかになった。脳髄は、全身の細胞の生命が反射交換され、統一される器官に過ぎない。それが可能になるのは、全身の細胞一つ一つが生命を有しているからである。

しかしながら、同時に脳髄がなければやはり思考することはできず、すなわち人間として存立すること、生きていくことは不可能となる。思考とは、全身の細胞の生命が脳髄において反射交換されることにほかならないからである。反射交換の場がなければ確かに全身の細胞の生命は集約され、統一された思考を生みえない。その意味で脳髄を頂点とした神経系は思考に必須のものである。だが、思考は脳髄が全身の細胞によらず脳髄だけで作り上げたものではなく、人間の全生命の集約としてできあがったものに他ならない。

脳髄も全身の細胞も生きているということに変わりはない。にもかかわらず、思考は脳髄のみがその仕組みによって生み出すものと主張されるのであるなら、他の細胞と脳髄を頂点とする神経系とは、生きているという点で同じ細胞であり、その構造においてことなるのであるから、思考は構造の違いによって生まれるものとなり、生命とは別物となろう。思考が生命と別物であるなら、脳髄が思考を生むはたらきもその構造に由来する機械的なものと見なされることになる。本章において久作が、脳髄のみから思考が生まれるという主張を唯物科学的と表現するのは、自覚的だったか無自覚だったかは分からないが、そのような認識によっているのではないか。これが、本研究ノートが考察の果てに至った一推測である。

付論　久作はどこまで本気だったか。

西原和海は『夢野久作全集 9』(筑摩書房、1992 年)の解説において、杉山龍丸編『夢野久作の日記』(葦書房、1976 年)から『ドグラ・マグラ』執筆に関する記事を抜き出しているが、1927 年 1 月 21 日の記事にこうある。

「脳に関する学説を小説にしつゝあるうちに、どうやら真実に思はれ来れり。可笑(おか)しきものよ」[26]

脳に関する学説を小説にするということは、ドグラ・マグラ内の「脳髄は物を考える処に非ず」というこの箇所の執筆と解釈することができる。「どうやら真実に思われ来れり」という文言の解釈が、久作がこの箇所の脳髄論についてどの程度真剣だったかの判断にも結び付くことになる。

久作が、真実かどうかはどうでもよいフィクションとしてこの箇所の脳髄論を執筆し、そしてそれが書いている間に真実のように錯覚されてきたのがおかしいというのなら、ここでは「どうやら」という語は使わず、「段々」などの表現を使うことになるだろう。久作は学者ではなく作家であった。作家を、フィクションの執筆を通じて真実を語る職業と考えるなら、執筆を通じ、あまりにも奇抜な説ながら、自分にも真実の語りになっているとどうやら思われてきた、不思議なものだ、という意味で書かれたのではあるまいか。

無論、あまりにも想像に補われた部分が多い―推測にすぎない。しかし、可能性が全くないわけでもない以上、一解釈―仮説に過ぎないものとして敢えて世に示しておきたい。

文献表

テキスト

・夢野久作(1935)『ドグラ・マグラ』(『夢野久作全集 9』筑摩書房、1992 年所収)
・夢野久作(1936)『悪魔祈祷書』(『夢野久作全集 3』筑摩書房、1992 年所収)

註　『夢野久作全集 9』(筑摩書房、1992 年)については『全集 9』と略表記する。同全集の他の巻についてついても同様に表記する。

1 『全集 9』、p.217。
2 『全集 9』、p.173。
3 『全集 9』、p.173。
4 『全集 9』、p.174。
5 『全集 9』、p.216。
6 『全集 9』、p.217。
7 『全集 9』、p.176-177。
8 『全集 9』、p.179。
9 『全集 9』、p.180。
10 『全集 9』、p.181。
11 『全集 3』、p.447。
12 『全集 3』、p.448。
13 『全集 9』、p.183。
14 『全集 9』、p.183。
15 『全集 9』、p.185。

[16] 『全集 9』、同上。
[17] 『全集 9』、同上。
[18] 『全集 9』、同上。
[19] 『全集 9』、p.179
[20] 『全集 9』、p.201-202。
[21] 『全集 9』、p.207-208。
[22] 例えば『全集 9』、p.199、p.232。。
[23] 「脳髄局ヨリ反射交感シ来ラザル事ハ、仮令自身ニ行イタル事ト雖モ、事実ト認ムベカラズ。記憶ニモ止ムベカラズ」(『全集 9』、p.205) 。
[24] 『全集 9』、p.232。
[25] 『全集 9』、p.231。
[26] 『全集 9』、p.661。

付記

本稿執筆後、校正段階において、百川敬仁『夢野久作　方法としての異界』(岩波書店、2004 年)の存在を知った。百川(2004)もまた、脳が反射交換機能を果たしているのなら、脳髄は考える処にあらずというコピーにも関わらず、人間の精神活動に脳が不可欠なことを否定できないことを本稿と同じく指摘している(p.35-6)。また、全身の細胞の記憶が脳で反射交換されたものが思考である以上、人間は身体の細胞に保存されてきた過去の歴史に束縛されており、自由な主体たり得ず(p.37-8)、もしそれが乗り越えられるとするなら、その手段は歴史による束縛の自覚だけであろうが、視点人物たる「私」は日本人としての意識、すなわち日本の歴史に束縛された意識にあえて閉じこもることで、遂に狂気からの脱出＝束縛の乗り越えを為し得なかった(p.95-6)というのが、執筆者が理解するところの百川(2004)の議論である。

百川(2004)は作家としての夢野久作全体を論じており、「絶対探偵小説　脳髄は物を考える処に非ず」の解釈も、この箇所だけを他から切り離して行なっているわけではない。それに対し本稿は、この箇所で久作が真実を映すフィクションとして展開している議論が、どのような構造の理論的体裁を有しているかに議論を集中している。

しかしながら、ここで百川(2004)に依拠しながら、夢野久作の思想の一側面と本稿の議論を関連付けてみたい。百川(2004)によれば、久作は天皇と人民を直結させる理想を持っていた(p.205)。天皇、政府、議会に代表される統治機関を脳髄を頂点とする神経系ととらえるなら、全身の細胞が人民となろう。そして、脳が全身の細胞の霊能を反射交換する機関にほかならないことの暴露は、天皇、政府、議会といった機関が国家の意志を独占するのではなく、天皇と人民の意志が直結した関係が本来あるべき国家の姿であることの暗喩的な喝破であり得る。脳髄を頂点とした神経系が人間の主体としての資格を独占していることを箇条にした『脳髄局、ポカン式反射交感事務、加入規約』の第一条、第二条(『全集 9』p.205)も、有司専制体制の比喩として見ることができよう。

また、百川(2004)は、日本において人民を天皇を含め相互に結びつけているのは「もののあわれ」、すなわち、生の無意味さに耐えて生きているという相互憐憫の感情(p.199-207; p.217-8)とするが、この感情的紐帯のアプリオリ性(この紐帯にからめとられている者たちにとっての絶対性)は久作の脳髄論と「胎児の夢」に本稿で最終的に見出された霊能の主体性と重なり合う。

さらに、本稿総括において、脳髄も全身の細胞も霊能を有すること、すなわち、生命を有するということに関しては同じであると述べた。脳髄が天皇、全身の細胞が人民であるなら、これは天皇と人民が、その生命においては平等であるということを意味する。そして、そのことは天皇と人民が直結する関係において鮮明に現出するということが、これま

での議論から示唆される。脳髄と全身の細胞の霊能の交換は、生命の交換であり、感情の交換だからである。

『ドグラ・マグラ』は夢野久作にとってその作家生活の大半に相当する 20 年を費やして推敲し完成させた作品であり、当人にとっての主著であると言える。そして、その脳髄論＝「絶対探偵小説　脳髄は物を考える処に非ず」は『ドグラ・マグラ』全体の展開を支える理論と位置づけられる。正木敬之は、この理論によって全人類を支配する法則を喝破し、また正木の同時代人がその中で生きる唯物科学的風潮の克服のための実験を行う。したがって、この脳髄論は、正木敬之の行動原理を語るものであり、作中世界での登場人物の行動を支配する法則でもある。

物語としては本作の視点人物である「私」は、前述のとおり、日本人意識に閉じこもってしまい狂気、すなわち全身の細胞が受け継いできた歴史の束縛を克服するのには失敗する。しかし、それは脳髄論を実践において貫徹することができなかったゆえの失敗であり、脳髄論自体には、少なくとも作中世界内での解決法(束縛の自覚による克服)は示されていると言える。この理解は、脳髄論からすでに述べたとおり解釈次第で、天皇と人民を生命に関し平等とする見方、すなわち、久作の意図を超えて最終的に近代天皇制を無効化する見方を導出できることで補強されると執筆者は考える。作者がコントロールしている物語は主人公を日本人意識に閉じ込めたが、作中人物の編み出した理論は作者の意図を超えた可能性を秘めているのである。

しかしながら、本作の作中世界を支配する法則の全体像を明らかにするには、脳髄論に加え、少なくとも「胎児の夢」まで分析すべきであるが、本稿ではそうするに至らなかった。これも今後の課題としたい。また、本作の作中世界において、そもそも「狂気」とは何を指すのかを明らかにする必要を今現在感じている。これも今後の課題としたい。

最後に百川(2004)に敬意と感謝の意を表する。この先行研究と対照することで、本稿の立ち位置を執筆者自身にとっても明瞭にすることができた。